

2026

令和8年7月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻395号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあるお



公益財団法人
さわやか福祉財団



いきがい・助け合い オンラインフェスタ2026

今年も地域づくりに関するさまざまな全国の事例やノウハウを発信します。

「住み慣れた地域で、誰もが安心して自分らしく暮らせる地域をどうつくっていくか」を一緒に学び合いませんか？

住民勉強会や、専門職との連携を目的とした情報交換会などに、関心のあるセッションを選んでご覧いただく活用方法もあります。ぜひご参加ください！

申込受付：2026年 **8月14日(金)開始** (予定)

【主な対象】生活支援コーディネーター、協議体構成員、地方自治体、社会福祉協議会、地域包括支援センター等の地域づくり関係者、国・関係機関、NPO・民間団体、企業、学校等の関係者、助け合い・支え合う地域づくりに関係する方、その他関心を持つ一般住民など

開催期間：2026年 **10月13日(火)**
～ **10月22日(木)**

開催方法：完全オンライン配信方式 (アーカイブ配信あり)

プログラム： **オープニングフォーラム** **特別トーク**

学ぼう編 **語ろう編** (ライブ配信)

参加費：1,000円(税込)

※参加費と同額を当財団の「地域助け合い基金」に拠出して、地域活動を応援します。

お問合せ

電話：(03)5470-7751(平日9:30～17:30)

メール：festa@sawayakazaidan.or.jp

(オンラインフェスタ担当)



●本文16・17ページもご覧ください。最新情報はコチラから ➡

とある

2026年7月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

今年もフェスタ みんなでフェスタ!

助け合いを広げる勉強会として
ぜひご活用ください

清水 肇子

4 | 生き方・自分流 |

支え合い、共に生かし合う地域のために

土屋建設株式会社 代表取締役会長 土屋 龍太郎さん（静岡県伊豆の国市）

10 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

労働者協同組合がつくる ふれあいと協働のプラットフォーム

労働者協同組合 甲南げんき村（兵庫県神戸市）

22 シリーズ 定年、その先へ 東京都江東区 実践ルポ 3

よっちゃん家の取り組みから③

活動10年、そして次の10年へ

一般社団法人地域コミュニティ振興協会代表理事 肘井 哲也

新しいふれあい社会づくりに向けて

18 「地域助け合い基金」

助成先のご紹介／状況のご報告

26 ご支援ありがとうございます。
さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

27 活動日記（抄）

16 「いきがい・助け合いオンラインフェスタ
2026」プログラム

21 『居場所ガイドブック』紹介

24 <コラム> 泉の会に感激

30 『さあ、やろう』近日発行

32 みんなの広場 / 投稿募集

助け合いを広げよう! 新・ひとりごと • 野村 浩子

今年もフェスタ みんなでフェスタ！

助け合いを広げる勉強会として ぜひご活用ください

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

毎年好評をいただいているフェスタ。4回目となる今年も「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2026」を、完全オンライン配信方式で10月13日（火）～10月22日（木）まで平日8日間にわたり開催します。その後も11月いっぱい、24時間いつでも自由にご視聴が可能です。地域づくり関係者はもちろん、本誌読者の一般の皆さんも気軽に興味ある分野を学べる良い機会です。ぜひ多くの皆さんにご参加いただければ大変うれしいです。

この「いきがい・助け合いオンラインフェスタ」は、住民が参加するこれからの助け合いの地域づくりを、それぞれの地域で自分たちが考えていくための支援ができればと企画し実施している。毎年のフェスタでも、行政や専門職、企業等地域のみんなで取り組むための有効な考え方、情報やノウハウを事例を含めてご紹介している。

冒頭を飾る「オープニングフォーラム」は、今年は「ウェルビーイングを支える幸福な生活支援」と題してお届けする予定だ。医療と助け合い、アート（芸術）と社会連携といった視点

を盛り込んだ議論も特長の一つ。

これからの超高齢社会、一人暮らし高齢者はますます増え、認知症もはや当たり前の前提とした地域の支え合いの環境づくりが求められる。社会的な孤独・孤立は若年層でも深刻化し、また、年齢に関係なく病気や障がいので日々の生活に支援が必要な人は大勢いる。公的な制度サービスの見直しや民間サービスの充実是不可欠だが、それだけではまったく足りないのも事実。高齢になってもどのような状態であっても住み慣れた地域でその人らしく最後まで暮らしていただけるためには、地域の助け合い、互助の仕組みの充実が欠かせない。困っている人の課題に向き合い、そして誰もが自分にできることで楽しくいきいきと参加し合える地域の助け合いの仕組みづくりをどのように広げていけるのか、今年も皆さんと一緒に考える機会になればと願う。そして、今年のフェスタの特色として、仲間同士の勉強会に活用しやすい試行を考えている。個別申し込みの参加費1人1000円は変わらないが、特に地域で学び合う機会として集まって視聴したいという皆さんからのお申し出には、人数にかかわらずそのグループ単位で5000円程度の参加費に抑えようというもの。生活支援コーディネーターや協議体の皆さん、地縁組織やNPOの関係者の皆さんなど、ぜひ地域づくりの話し合いを深める学びの場としても活用してもらえればうれしい。

例年どおり、学ぼう編では、助け合い推進に向けた基本知識と事例をご紹介します。語ろう編はライブの双方向の意見交換を含めた実践プログラムで全11コマ。さらに特別トークは、社会の最新情勢や知識を簡潔に学べる本フェスタならではのもの。いずれもすばらしい講師陣の皆さんにお集まりいただいている。お申し込みは8月、ぜひ今からご計画ください。

生き方 ・ 自分流

支え合い、共に生かし合う地域のために

土屋建設株式会社

代表取締役会長

土屋

龍太郎さん（静岡県伊豆の国市）

創業80年以上の伊豆半島の老舗建設会社、土屋建設。地域経済の循環と地域貢献に尽力し、「人生三毛作」を提唱する同社会長の土屋龍太郎さん（74歳）に人生観を聞きました。

（取材・文／境 朗子）



土木技術者を目指した原体験

1958（昭和33）年9月、伊豆半島を狩野川台風が襲った。死者・行方不明者1200人以上。この大惨事は、当時小学1年生だった龍太郎少年の胸



土屋龍太郎さん

1952年生まれ。1974年土屋建設株式会社に入社、2003年より代表取締役社長、2024年より現職。株式会社大仁まごころ市場社長。中学校PTA会長、消防団本部長、伊豆中央地区保護司会会長、市商工会長等を歴任し、2025年、瑞宝双光章受章。洋美夫人との間に2男4女、孫が9人。好きな言葉は「縁尋機妙」「多逢勝因」「人間万事塞翁が馬」。

に強く焼きつけられた。

「川の氾濫で牛や馬が泥水に浮かび、近所の集落が丸ごと沈むのを目の当たりにしました。親戚も亡くなっ
てしまいました」と土屋さんは回想する。

家は農家で、学校から帰ると家畜の世話や畑を手伝う日々。親に「勉強しなさい」などと言われたことは一度もなかったが、中学生になると勉強熱心な親友と切磋琢磨し、成績はトップクラスになった。そして台風
の原体験から、土木技術者になることが土屋さんの夢となった。



「俺が留守番役に」 地元の恩に報いることを決断

自宅から遠い進学校を目指す長男の龍太郎さんを、両親は応援してくれた。中学3年生の年の暮れ、父親が急逝したときも、母親は「農家を継いでほしい」とは言わなかった。

高校から早稲田大学理工学部土木工学科（当時）へ進学すると、河川工学を専攻。夢は大手ゼネコンに就職し、国家プロジェクトに関わることだった。

ところが大学3年生のとき突然、実家の母親から「おばあさんと話し合っただけ、卒業したら実家に戻

りなさい。就職先は地元の土屋建設に決めてあるから」と告げられた。

大手ゼネコンで活躍する夢は？と問うと、「しょうがないか、と思いましたね」とあっさり。

「自分はこの土地に生まれ、愛され、大事に育てられましたので、家族や周りの人たちの思いに応えようと思います」

大学卒業後は地元で生きると心に決め、同級生や地元の仲間を「お前たちが定年で戻ってくるまで、俺が留守番役をする」と宣言して送り出したという。

東京帰りの土屋さんは、入社すると周囲の期待を一身に集めた。しかし……。

「現場経験はもちろんゼロ。昼間は懸命に知ったかぶりで背伸びをして、夜は猛勉強で必死でしたね」

現場は皆、自らの技術にプライドを持つ目上の男性ばかり。どうすれば自分の言うことに耳を貸してもらえるのか――。

土屋さんが見いだした答えは、「相手を認め、信頼する。やり方は任せるが、方向性は示す」というものだった。その人の能力に敬意を払って接した。

そうして22歳の新入社員は、生コン工場の規格取得という大役を任せられ、見事成し遂げた。

妻・洋美さんとの出会い

学生時代は勉強に明け暮れ、社会人となってからは仕事一筋だった土屋さんの「お固い」日常に、あるとき美しい光が差し込む。土屋建設社長の2人姉妹の長女、洋美さんとの出会いだ。

「お見合いです。私は女性に免疫がなかったのですが、一発でポーションとなっちゃって（笑）」
すでに日本舞踊の名取だった洋美さんのあでやかな



土屋さん一家（1989年）

舞台も「内緒で」見に行き、心を奪われた。一緒にやりたいと思ったが、婿養子として土屋家に入ることは、農家の長男としての道を捨てることだ。

迷いはあった。しかし、実家の親戚に「お前は、事業者になりたいのか」と正面から問われて腹が決まり、「はい」と大きく頷いた。妹に実家を託し、1978年、土屋さんが入社4年目のときに2人は結婚した。

夫妻は結婚後、6人の子どもを育てた。洋美さんは土屋さんとともに市商工会の理事なども歴任し、現在は「花咲く伊豆の国推進協議会」の会長として熱心に活動。花壇作りを通じて市民の交流の場を創出し、道の駅の「おもてなし花壇」は訪れる人々をあたたく迎える。

「家内は、地域活動の同志です」と土屋さんは目を細める。

地域全体が元気でなければ

地域に根差す建設会社の社長を務めてきた土屋さんは、市商工会長などの業界団体のみならず、消防団本部長、PTA会長、学校運営協議会委員、保護司等々、地域の要職も担ってきた。声をかけてもらえば引き受

け、異業種交流が広がり、さまざまな分野の人たちとつながりができた。

しかし意外にも「私は内面に向かっていろいろ考えていくタイプで、実は人が苦手なんですよ」と述べ懐する。「だからこそ、相手を尊重し、いい距離感を保ちながら礼を尽くすことを意識してきました。そうすると不思議とネットワークが広がって、いろいろな方の知見や考え方、情報をいただける。それが新しい活動につながっていきました」

そうした中で土屋建設の農業分野への参入を決断したのは、2011年。時代の流れとともに公共工事の受注が減り、社員の仕事をどう確保するかという難題に直面していた。

「建設業には、地元でインフラを担う使命、災害が起きたときには現場に駆けつける使命もあります。そのためにも、技術者たちが働き続ける場を確保するのは会社の重要な役割で、人員削減ではなく新しい分野に挑戦しようと考えました」

地元の農業を活性化したいと考えていたことも、参入した理由の一つだ。後継者不足や耕作放棄地の増加など、地域の農業には翳りが見えていた。しかし、地元が元気でなければ、本業の存続もあり得ない。土屋

さんは「自分たちさえ良ければ」という考え方でなく、地域の「循環」を第一に考えた。

当初、現場の社員たちからは戸惑いの声が上がったが、土屋さんは「お世話になっている地元のために頑張ろう」と説得。本業の強みを生かし、重機の活用や土地改良のノウハウを農業に注入して、自社ブランド「ろっぽう野菜」の生産を開始した。

それから15年。

「こつこつ続けてきて、ようやく作りたいものが作れるレベルに達しました」と土屋さんは笑顔を見せる。

販路は、社屋前の直売所、道の駅やスーパー、地元の生産物を販売する場として設立し土屋さんが社長を務める「まごころ市場」などだ。地元では「新鮮で、安心して食べられる」と喜ばれている。



土屋建設の農業では、作物の収穫等に重機を活用。新鮮で安全なろっぽう野菜は、市内各所で販売され好評だ



人の役に立つ喜びを知る

土屋さんの価値観に大きな影響を与えた出来事に、東日本大震災後の復興支援活動がある。

震災直後、伊豆の国市建設業協会の会員たちは被災した宮城県多賀城市などで、がれきの撤去や建築物の解体作業に従事した。すると、たくさんの市民から「ありがとう」と言われた。

「建設業の仕事は、騒音やほこりなどで苦情を言われることもあります。そんな中でかけられた感謝の言葉は、会員たちに『自分たちは感謝される仕事をしているんだ』という誇りと自信をつけてくれました」

土屋さんも、地元に戻ると「土屋さんのところの人たちが東北で頑張ってるね。ありがとう」と声をかけてもらいうれしかった、と振り返る。

この経験は、その後の地域貢献にもつながった。

2016年、市民の声を発端に、市内で「ベンチプロジェクト」が始まった。高齢者などの地域住民が安心して外出できるよう、街角に手作りのベンチを設置する活動だ。土屋さんの呼びかけに建設業者や大工組合などが喜んで参加。ベンチを製作して設置すると、

やはり「ありがとう」と言われた。

「みんな、照れ笑いで顔を真っ赤にするんですよ」と土屋さん。

さらには、出来上がったベンチに置く座布団を作ってくれる人、個人宅前に置

かれたベンチの脇に看板を添える人などが出てきたほか、高校生が卒業制作として参加するなどプロジェクトは広がりをみせ、100基を超えるベンチが市内のあちこちで市民の交流を生んでいる。

「人は、小さな活動を通じて、感謝され人の役に立つ喜びを知ります。みんなが地元を愛し、誇りに感じるきっかけになるとでしょう」



市内のベンチは、市民の憩いとふれあいの場に





「人生三毛作」で生きましよう

「人間万事塞翁が馬」

土屋さんが好きな言葉だ。幸せが不幸に、また、不幸が幸せに転じることもある。

60歳のとき、土屋さんはがんと診断されたが「早期発見だった。私は運がいい」と受け止めた。すると「自分で会社を設立して独立する」と言っていた長男の昭さんが会社を継ぐと宣言し、次世代にバトンを渡す道筋が見えた。2024年、代表取締役会長となり、昭さんが社長を引き継いだ。

「人生三毛作」。これは土屋さんが60代前半から提唱するようになった言葉だという。

「昔は60歳定年になったら数年のうちに『お迎え』が来ていました。今はお迎えまでに時間がかかるでしょう。その間『三毛作の花を咲かせようじゃないか』と呼びかけているんです」

土屋さん自身、病を克服した今、「人生の3期目」にあると感じている。若い頃は知識と技術、中年期は経験と人脈、そして3期目となる高齢期は知恵と地域貢献だ。

現在興味を持って

いるのは「Agin

g in Place」、

つまり「終の棲家と

しての地域」だとい

う。2023年に実

母と義父を相次いで

見送り、在宅でどう

看取るかについて考

えさせられた。

「年を重ねても住み慣れた場所で家族や顔見知りに関まれ、最後まで自分らしく暮らせる。それが理想ではないでしょうか。農業もベンチプロジェクトも、すべて地域の中で支え合いながら生きていける地域社会のためのつながりづくりだと思っています」

土屋さんは人生の岐路に立つたび、運命を懐深く受け入れ、課された役割を全うしてきた。

「自分一人ですることには限りがある。だから周り」と手を取り合い、共に生かし合う道を探すのです」

そんな土屋さんの「共存共栄」の精神は、これからも伊豆の地にあたたかな循環と実りをもたらし続けるだろう。



2025年春、瑞宝双光章を受章。叙勲伝達式にて洋美夫人と

広げよう つなげよう 地域助け合い

活動の現場から



労働者協同組合がつくる

ふれあいと協働のプラットフォーム

労働者協同組合 甲南げんき村（兵庫県神戸市）

神戸市の住宅街にあるジョッピングモールのフードコート。ここにある「甲南げんき村」（以下、げんき村）は地域住民の居場所であり、つながりを育む場でもあります。初夏祭りが開催された日、さまざまなつながりを取りました。

（取材・文／森 祐子）

居場所であり協働の拠点

5月の土曜日。神戸市東灘区にあるジョッピングモール「コープリビング甲南」1階のフードコートには、お昼ご飯を食べる買い物客に混ざって、スタンプカードを手にした親子連れが続々とやってきては奥の部屋に吸い込

まれていく。部屋では箱いっぱいのおもちゃを見て、子どもたちが目を輝かせている。この日、2階の多目的室で開催された「甲南げんき村初夏祭り」で遊んだ後、抽選会で景品をもらうために訪れた人たちだ。

祭り会場では、やかんカーリングや射的、缶バッジ作りなどが開催されて

おり、そこでスタンプをもらうと抽選に参加できる。熱心にシールを選んでる小学5年生の女子は、「放課後、

甲南げんき村が入る
コープリビング甲南



暇な日はここに来て宿題をしているの。
金曜日は勉強を教えてもらえるんだ
よ」と教えてくれた。お母さんは「私
が仕事をしている間によく来ているみ
たいです。ここに来るなら安心なので
助かっています」と笑顔だ。

げんき村はコープリビング内のフー
ドコートの一画に入居しており、毎日
カフェを開催。2000円で好きな飲み
物と小さなお菓子が提供され、買い物
に来た人、新聞を読みたい人、ちょっ
と休憩したい人、小さな子どもを連れ



やかんカーリングに参加する親子



抽選でもらえるおもちゃ選
びに夢中の子どもたち

た人など、さまざまな人たちがげんき
村のスタッフや居合わせた人たちと何
気ない会話を交わし交流できる。もち
ろん、1人で気ままに過ごすのも心地
いい。

この日抽選会場となっていた奥の部
屋には、普段はソファやテーブルがあ
り、放課後は子どもたちの居場所にな
っていて、毎週金曜日は近隣の甲南大
学からボランティアサークルの学生が
来て勉強を教えてくれる。

団体も個人もここでつながる

げんき村は、コープリビング内で居

場所を提供するだけでなく、地域の活
動団体や住民のつながりをつくり出す
場にもなっている。

居場所を拠点に、高齢者のごみ出し
や買い物支援など、住民が生活の困り
事を相談できる「お手伝い相談」の場
でもあり、困り事解決のための支援を
する40〜50人ほどの「協力者」（住民
ボランティア）がいる。

また、げんき村と初夏祭りを共催し
た就労支援B型事業所「ぼこあぼこ」
や、お祭り会場の運営を担当してくれ
た一般社団法人「ちやいんど未来ラ
ボ」など、現在、地元の15団体がげん
き村に登録。団体は月会費を支払い、
げんき村のスペースを活用して地域住
民を対象としたセミナーやイベントな
どを開催できる。日頃からさまざまな
団体が企画を形にし、それに参加して
みようという住民がげんき村を訪れる。
壁際に設置されているロッカー形式

コープリビング甲南内の甲南げんき村



の棚「ふれあいボックス」は、地域住民の発信の場だ。月会費でボックスを1つずつ借り受け、自分の手作り

作品や告知チラシなどを自由に展示できるほか、月に2時間ほどげんき村で講座を開くこともできる。主に書道教室や絵画教室、囲碁や将棋教室など、地元の人たちの「得意なこと」でつながれる場となっており、おかげでげんき村は毎日のように何かしらのイベントでにぎわう。

ここには、人が集まり交流するためのアイデアと仕掛けがたくさんある。

もっと地域住民が世代を超えてつながり合える場を

代表の中村保佑さん（81歳）に「労働者協同組合 甲南げんき村」設立の経緯を聞いた。

「私は会社員時代に20年も東京で単身赴任してきたので、65歳で定年退職して神戸に帰ってきたときに居場所がなかったんです。そこで、地域の子どものたちのために何かしようと思って調理

師免許を取得し、子どもの食育と、ほかでもない自分自身の居場所として『東灘こどもカフェ』を立ち上げました」

2011年に中村さんが立ち上げた東灘こどもカフェは、神戸市東灘区の商店街近くで当初週3回からスタートしたが、「もっと来たい」という子どもたちの声に応えて毎日オープンとし、弁当配食や子育て世帯への食支援など、活動の幅を広げていった。

活動を始めて10年が過ぎた頃、中村さんは少しずつ子どもたちを取り巻く問題が深刻化していくのを感じた。

『七夕の短冊に『死にたい』とか『自由になりたい』と書く子が出てきたんです。社会の変化とともに子どもの孤独や孤立が進むのを感じ、1団体でできることの限界を感じるようになりました」

もっと地域みんなが力を合わせて、

*労働者協同組合 2022年10月に施行された「労働者協同組合法」に基づく新しい法人制度。組合員が出資し、全員で協議して事業を決め、組合員が自ら事業に従事する。

子どもから高齢者まで住民全体のつながりをサポートする場をつくりたいと考えるようになった。

「公共施設だと毎日開催する居場所が難しい。それなら地元住民に馴染みのある場所がいいと思って、コープリビング甲南さんに声をかけさせてもらいました」

げんき村が入るフードコートの一画はそのとき、ファストフード店が閉店

し空きテナントになっていた。そこで当時のコープリビングの店長に相談したところ、契約には法人格が必要だと分かった。

ちょうどその頃、労働者協同組合が施行され、認定NPO法人「コミュニティ・サポートセンター神戸」が開

催した勉強会に参加し、中村さんが思い描く居場所づくりの構想を話すと、4人の受講者と意気投合することができた。そうして東灘こどもカフェの運営を旧知の仲間任せ、24年1月、5人で出資金を出し合い設立したのが「労働者協同組合 甲南げんき村」だ。



甲南げんき村代表の中村さん（左）と事務局長の英賀さん（右）

コープリビング甲南店長 松本みゆきさんの話



地域の皆さんとのつながりを大事にするという点では、コープもげんき村さんも共通していますので、ここにげんき村さんが入居していることはとても意味のあることです。

現在ぼこあぼこの利用者さんに、コープの店頭と並ぶ商品の賞味期限切れの点検のお仕事をお願いしています。げんき村で熱心に働く様子を見て、こちらからオファーしました。

この地域は小学4年生から学童保育がなくなってしまうので、ここが放課後の子どもたちの居場所になっていて安心ですし、私自身も将来、高齢になったときにこういう場所が自宅の近くにあったら、孤立せず安心して暮らせるだろうと思います。

これからもいろいろな形で協働していけたらと思っています。

主体的に働き、 アイデアを実現できる楽しさ

現在、げんき村は毎日の活動に加えて月1回定例会を開き、組合員と協力者の中心メンバー10数人が集まって活動報告や提案事項などを話し合っている。中心メンバーの一人が、事務局長の英賀明子さん（55歳）だ。

「事務局長なんて肩書ですけれど、私は何でもやります。講座の日程調整や売り上げの計算、毎週金曜日の子ども塾、月2回開催するお料理教室などの運営を中心に担当しています」と英賀さん。子どもが大学に進学して育児が一段落したのをきっかけに、何か仕事を探そうと思っていたとき、近所のコープリビングで開催されていたげんき村のお祭りに顔を出し中村さんと知り合った。自ら出資するという労働者協同組合の仕組みはのとき初めて知っ

たが、今ではげんき村が英賀さん自身の居場所にもなっているという。

「以前、一般企業で会社員をしていたときは、指示されたことをやっていました。今、げんき村で働いていると、例えば『フリマスペースをつくりたい』といったアイデアを思いついて、組合員で話し合ってパッと決まってパッと実現できるので楽しいです。私の父が地域活動に熱心だったのですが、私もやっぱり地域の皆さんと一緒にやる活動が合っているみたいです」と、いきいきと話してくれた。

現在15あるげんき村の登録団体は、中村さんたちがげんき村のしくみを説明して1団体ずつ集めてまわった。ぼこあぼこ代表理事の加納郁久さん（65歳）は、東灘こどもカフェの頃から中村さんと知り合いで、声をかけられて参加を決めた。

「登録団体になってよかったです。お



（上写真）ふれあいボックスの利用を決めた藤本さん（左）

（左写真）ぼこあぼこ代表理事の加納さん



祭りの間も普段も、うちの利用者さんが店番を担当しているのです、

地域の子どもたちと自然にふれあえます。精神障がい者は怖いと思われがちで、孤立しやすいんです。役割を持って地域の一員として参加できるのは、利用者さんにとつてとてもいいことです」と語ってくれた。今後はこの場を利用して、精神障がい者について地域



甲南げんき村組合員と協力ボランティアの皆さん

住民に知ってもらうための講演を企画しているそうだ。

取材中、ふれあいボックスを熱心に見てまわる女性がいた。藤本洋子さん（53歳）だ。中村さんが話しかけると初対面なのに話が盛り上がり、藤本さんはふれあいボックスを契約すること

にした。

「地域活動に興味があったので、今日を第一歩にして私がやれることから始めてみたいと思います。ふれあいボックスを使って何をしようか、今から楽しみです！」と藤本さんはキラキラした笑顔を見せてくれた。

* * *

げんき村の今後について中村さんに聞いた。

「運営面で多少の課題はありますが、スタートから2年経って、目標通りにいろいろな地域住民や団体が交流できる場所になっています。たくさんの人に来てもらう工夫を話し合っていて、実現するのは面白いですから、関わる人たちのやりがいにもなっています。今後もメンバーや団体が入れ替わったり、活動内容が変わるかもしれませんが、新陳代謝しながらみんなの工夫とアイデアで長く続け

ていきたい」

いつでも誰でも行けて、そこへ行けば自由に過ごせて何か楽しいこともある。自分がメンバーとなつて参加することもできる。地域のプラットフォームとなつたげんき村の今後の広がりに注目していきたい。

労働者協同組合 甲南げんき村

誰もが元気にいきいきと暮らせる、誰かとゆるやかにつながれる地域づくりを目的とする労働者協同組合。活動拠点はコープリビング甲南1階フードコート内

<活動団体登録>5,000円/月

<ふれあいボックス個人利用>1,000円/月

<営業時間>10～17時（カフェは10～15時）

<定休日>年末年始（コープリビング甲南に準ずる）

●連絡先／電話 090-7701-6393（中村）



プログラム

オープニングフォーラム

「ウェルビーイングを支える幸福な生活支援」

佐々町多世代包括支援センター参事

特別トーク

■ ケアマネジメントにおける助け合いの位置づけ

石山 麗子氏 国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科教授

■ 孤立予防と社会参加、助け合い

(一社) 医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構研究部長

■ 認知症の人への理解と対応

(公社) 認知症の人と家族の会 顧問

■ 目指す共生社会と2040年に向けた地域包括ケアシステム

田中 滋氏 埼玉県立大学理事長 慶応義塾大学名誉教授

■ SCと協議体とフレイル予防

辻 哲夫氏 (一財)医療経済研究・社会保険福祉協会理事長

■ これからの社会保障のあるべき姿

中村 秀一氏 (一社) 医療介護福祉政策研究フォーラム理事長
国際医療福祉大学大学院客員教授
日本福祉大学客員教授

■ 共生社会を創るために

村木 厚子氏 (社福) 全国社会福祉協議会会長

■ 地域づくりに関する最新政策動向

佐藤 清和氏 厚生労働省老健局認知症施策・地域介護推進課地域づくり推進室室長補佐

■ 地域づくりに関する最新政策動向

内閣府孤独・孤立対策推進室 担当官

学ぼう編

- ◆ 地縁での助け合いをどう進めていけるか
- ◇ 助け合いにつながる居場所とは
- ◆ 住民の意識をどうしたら醸成できるか
- ◇ 地域に広げよう生活支援(有償ボランティア)
- ◆ シニアの地域参加の広げ方
- ◇ 認知症の人と共に生きる地域づくり
- ◆ 子どもの育ちを地域で応援しよう
- ◇ 助け合いの価値と評価の考え方とは

語ろう編 ※ライブ配信のみ。双方向での意見交換・質疑応答あり

- ◆ 生活支援コーディネーターと協議体による地域づくり
- ◇ 共生常設の居場所と多様な主体の連携
- ◆ 一人ひとりのニーズをどう地域全体で解決するか

◎フェスタの概要は、表紙裏もご参照ください。なお、詳しい情報は財団ホームページで随時更新していますので、ご覧ください。

◎過去3回の「いきがい・助け合いオンラインフェスタ」のダイジェスト版も、同ページからダウンロードできます。

【URL】 <https://www.sawayakazaidan.or.jp>

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、地域共生社会実現のための活動を支援している「地域助け合い基金」。
今月号は、住民主体の生活支援活動2件をご紹介します。なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていきますので、多彩な活動をぜひご覧ください。

山形県鶴岡市

地域住民による

「お互いさま」の生活支援活動

支え合い「つなぐ」

助成金額 5万円

鶴岡市三瀬地域には約480世帯、約1200人が暮らしていますが、高齢化が進み、これまで地域で自然に行われてきた住民同士の「声かけ」や「助け合い」が難しくなりつつあります。かつて地域を支えてきた人たちが支援を必要とする状況も増えており、住み慣れた地域で安心

令和7年

積み重ねた地域で自分らしく生活をつづけるために

支え合い「つなぐ」

7月1日よりサポート開始

高齢者の日常生活での困りごとに地域住民のサポートスタッフがお手伝いします

●利用者のサポートご利用の流れ

- ① 利用者申込書の提出(登録)
- ② 利用券を購入(10枚組1,500円)
- ③ サポート利用を申し込み(電話)
- ④ お願いした日時に活動会員がサポート実施
- ⑤ 利用料分の利用券を活動会員へ渡す



支え合い「つなぐ」で利用者とサポーター(活動会員)をおなじみします。

サポーター(活動会員)同時募集!!

6/20(金)夜7時30分よりコミセンにて説明会を開催します。若い方・中高生、お待ちしております!!

●サポート内容・料金

サポート内容	利用券枚数	サポート内容	利用券枚数
1. 車むしり	30分まで3枚	9. 灯油詰め (ホームタンクからポタンクへ)	2枚
2. 草刈り(機械)	30分まで4枚	10. 灯油詰め (ポタンクからストーブ等へ)	1週間4枚
3. 煙おこし(人力)	30分まで3枚	11. 電球・電池の交換	1枚
4. 煙おこし(機械)	30分まで4枚	12. 書類の説明・代読・代筆	1枚
5. 家の周りの掃除 (枯草・くもの撤去)	30分まで3枚	13. 家財の移動・設置 (大きい・重いもの)	活動会員 1人につき3枚
6. ごみ出し (区画からごみステーションまで)	1週間1枚	14. 家電・スマホ等の操作説明	2枚
7. 買い物代行 (車の受取代行含む)	4枚	15. 障子貼り (部分補修程度)	30分3枚
8. 掃除・片付け (1週間程度までの日常的なもの)	30分まで3枚	16. 地域内移動支援 (三瀬地域内)	10分1枚~

●利用者とサポーター(活動会員)の登録・利用券購入・ご相談

【初回申込み】6月13日(金)まで ※期日を過ぎても大丈夫です

【お申込み先】 鶴岡市三瀬地域生活支援センター 電話:023-222-1111

【相談窓口(※)】 鶴岡市三瀬地域生活支援センター 電話:023-222-1111

※利用申込み、ご相談はいつでも受け付けております。お近くの、支え合い「つなぐ」委員へご相談ください。



支え合い
「つなぐ」の
広報チラシ

して暮らし続けるための新たな支え合いの仕組みづくりが求められています。

こうした課題を受け、三瀬地区自治会や生活支援コーディネーターと連携し、住民主体の助け合い組織「つなぐ」を昨年立ち上げました。活動会員を募りながら、買い物代行や室内外の清掃、ごみ出しなど日常生活の支援を行っています。また、「助ける側」と「助けられる側」を分けて、「お互いさま」の関係で「これからも自分らしく暮らし続けたい」という思いを実現するために取り組んでいます。

今回の助成金は、事務用品等の備品購入、利用者向けチラシ作成、保険料などに活用されました。

活動を通じて利用者からは「話せる相手ができて安心した」といった声が寄せられ、新たなつながりが生まれています。今後も無理なく活動を続けられるよう、一人ひとりができることを持ち寄り、多世代にもつながりを広げていきたい、と抱負を寄せてくださいました。



助成金で購入されたビブスを身につけて助け合い活動

話し合い、養成講座、アンケートを経て 住民主体の助け合い活動

静岡県袋井市

三川まちづくり協議会 生活支援部

助成金額 15万円

袋井市三川地区では、地域福祉懇談会等を通じて住民が地域課題を話し合い、必要な支援や活動を創出してきました。2023年には市社協の「生活支援ボランティア養成講座」に約30人が参加し、その後の全世帯アンケートを通じて、「ごみ出し」や「庭の草取り」が高齢者の大きな困り事であることが明らかになった。一方、協力できる住民も多く、住民同士の支え合いによる生活支援活動の立ち上げ

「地域助け合い基金」状況のご報告

(6月15日 当財団ホームページ開示時点)

◎寄付受付額

440件 2億2264万2637円

このうち遺贈基金より1億8000万円を供出

◎助成実行額

1459件 2億1962万3538円

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

- 基金に関する情報、
およびクレジットカード決済は、
上のコードもご利用ください

基金に関するご意見・お問い合わせ

地域助け合い基金担当

電話：(080) 9277-4174

FAX：(03) 5470-7755

メール：

tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

につながりました。25年には「三川まちづくり協議会 生活支援部」を発足し、有償ボランティアでの支援を開始しました。

今回の助成金は、活動用ビブス・事務用品・除草用具等の購入、通信費、チラシ作成などに役立てられました。

現在はおみ出しや庭の草取りの活動を行っており、将来には家事支援などへの拡大も視野に入れています。利

用者の掘り起こしや活動の周知、担い手世代の偏りなどが課題となっています。今後は地域のさまざまな場で活動を広く周知しながら、住民同士が支え合い、安心して住み続けられる地域づくりをさらに進めていきます、と報告をいただきました。



『いつでも誰でも行ける場所を広げよう！ 居場所ガイドブック』

ぜひご活用ください！

「いつ行ってもいい、誰が行ってもいい、何をしてもいい」共生型常設型の居場所を地域に広めましょう。自分らしく過ごせる場所がある安心感、また、地域の絆をより深め、助け合う関係を広げるための居場所づくりのノウハウと事例が盛りだくさんです。

【目次】

- 1章 居場所ってなに？
- 2章 居場所のつくり方
 - 1 ひ と 思いを持った人を中心に仲間を広げていく
 - 2 も の 拠点となる場所や物品
 - 3 おかね 立ち上げ資金や運営費用
 - 4 情 報 周知・PR
 - 5 運営のコツ
- 3章 居場所の事例（21事例）
 - 1 基幹型
 - 2 交流型
 - 3 イベント型
 - 4 食事会型、「子ども食堂」
 - 5 その他
- 4章 活動に対する支援のあり方
民間による支援／行政による支援／
補助金・助成金以外の行政の支援
- 5章 「新しい総合事業」
（通いの場）の活用



お問い合わせは当財団まで （03）5470-7751

本書のPDFは、当財団のホームページからダウンロードもできます。
勉強会など大人数での使用にどうぞご利用ください。

<https://www.sawayakazaidan.or.jp/public-relation-tool/>

シリーズ

定年、 その先へ

地域とのつながり方

東京都江東区
実践ルポ

3

よっちゃん家の取り組みから③ 活動10年、そして次の10年へ

(取材・文) 一般社団法人地域コミュニティ振興協会代表理事

肘井 哲也

多世代交流の居場所として活動を続けてきた「砂町よっちゃん家」が、今年で開設10周年を迎えた。3月14日、東砂西地区集会場において「多世代交流の里 砂町よっちゃん家開設10周年・法人化祝賀パーティ」が開催された。会場には大久保朋果江東区長をはじめ、町会関係者、小・中学校の校長先生、社会福祉協議会職員など50名を超える人々が集まった。この日は、よっちゃん家の10年間の歩みを振り返りながら、一般社団法人として新たな一歩を踏み出す節目を祝う場となった。参加者の全員、よっちゃん家の熱い思いが語られ、活動が多くの人々に支えられ、皆でつくり上げてきたことを改めて実感する時間となった。

吉野義道さんが特に心に残っている出来事として語ったのが、東日本大震災を機に福島県から避難してきた高

齢女性との出会いである。女性は東京で暮らす息子家族のもとへ身を寄せたものの、慣れないマンション生活では近所付き合いもなく、誰とも話さない日が続いた。孤独から心身の不調を抱え、医療機関に通うようになったという。

そんな折、担当医から紹介されたのが「よっちゃん家」だった。通ううちに少しずつ人との交流を取り戻した女性には、後に「東京に来て、こんなに人が優しく接してくれる場所があるとは思わなかった」と涙ながらに語ったという。吉野さんは、この出来事を通して「人と人とのつながりの大切さ」を改めて実感したと話す。

活動を支えてきたのは、開設当初から地域福祉の活動と一緒に関わってきた仲間達である。多くが民生委員として地域福祉に携わってきた経験を持ち、「学んできた

ことを、実際の現場で生かせるのが嬉しい」「福祉とはこういうことだと実感できる」と語る。高齢者や子ども、地域で孤立しがちな人たちと直接向き合い、一人ひとりの変化を身近に感じられることが活動の大きなやりがいとなっている。こうした地域の担い手たちの思いが、「よっちゃん家」の温かな雰囲気をつくり出している。

また江東区社会福祉協議会の職員も「地域の居場所」の立ち上げに深くかわり、毎月のよっちゃん家の運営会議に参加し、金銭的な面では助成制度を新設すること支援してきた。そして「よっちゃん家」との関わりがきっかけとなり江東区社会福祉協議会は、地域住民が主体となる多機能型地域福祉活動拠点を支援する助成制度を創設する。現在も継続されており、地域の居場所づくりを支える仕組みとして活用されている。

10年間の活動の継続は、子どもたちの成長という大きな成果も生んだ。子ども食堂に通っていた子どもが高校生になり、「今度は自分が手伝いたい」と話すようになったという。支えられていた子どもが、今度は地域を支える側へと成長する。長年の活動だからこそ生まれた、世代を超えた循環と言えるだろう。

一方で、5月に87歳を迎えた吉野さんは次の10年を見

据えている。一般社団法人化を進めた大きな理由の一つは、活動の継続性を高めるためだ。現在の運営メンバーの多くが同世代であることから、より若い世代の参加を促し、運営も多世代がバランスよく参加することを望み、新しい取り組みにもチャレンジして新しい人が参加する機会もつくりたいと語る。

そのためにも東京都狛江市にある「野川のえんがわこまち」や江戸川区にあるカフェ「ひげぞうのいえ」等に訪問して「よっちゃん家」の運営や新たな取り組みの参考にしている。現在よっちゃん家の隣接するスペースを活用したコミュニティカフェの開設を準備している。地域の住民が気楽に楽しめて若い世代も気軽に立ち寄れるコミュニティカフェをつくりたいという。

「生まれ育った街をより良くしたい」

その変わらぬ思いが、今もなお吉野さんの活動を支え続けている。



(ひじい てつや) 東京都江東区・江戸川区、横浜市港北区を中心に地域の社会活動等に幅広く関与し、シニア、高齢世代向けの地域活動情報紙「えがお」、地域の共生社会活動をテーマにした「みなてらすPRESS」を発行する。認定NPO法人キッズドア理事、贈答品会社株式会社東香代表取締役。

「泉の会」のあたたかさと 本誌特集記事に感激

静岡市の藪崎敦子さんから、本誌に投稿をいただきました。

藪崎さんをご親戚から送られてきた野菜が自宅で使いきれず、ネットや電話で寄付先を探してNPO法人泉の会（静岡市清水区）が生ものでも受け入れてくれるということで訪問。

「初めて訪れた場所にもかかわらず、そのあたたかい雰囲気に魅了され、2度3度と訪問しました。調理担当の木村さんは、私が寄付した野菜をどう使ったかとても丁寧に説明してくださいました。そのときに『さあ、言おう』3月号をいただき、自分の寄付先（泉の会）が特集されていることに感激！ もっと何かできないかと、いろいろな物を手作りしている泉の会にアクリルのエコたわしの作製をお願いして購入しましたが、その仕事の丁寧さ、品質の良さにまたしても心を打たれました」ということです。

さらに藪崎さんの長女もこの交流に心を動かされ、藪崎さんと一緒に訪問した際、泉の会に寄付をされたそうです。

人と人をつなぐあたたかい居場所で、その後も藪崎さん親子と泉の会の皆さんとの交流は続いています。



泉の会の皆さんが作製し、
藪崎さんが購入したエコたわし



前列左から時計回りに、藪崎敦子さん、泉の会の渡部恵美子さん、木村順子さん、三浦香織さん、藤下品子さん

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

● さわやか活動日記（抄）



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2026年5月1日～5月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日とずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人 (81件)

(都道府県別50音順)

北海道	滝口 健次	袖井 孝子	大坪 直子	長野県	児玉 恭教
竹内 修一	寺島 知子	城 知子	小林 重敬	河野 孝子	田中 茂雄
星川 光子	土井 猷治	谷山 尚	古村 照夫	野村 尚	兵庫県
宮城県	千葉県	土田 悦子	島津 禮子	古川 晴雄	中村 順子
伊藤 壽朗	坂口 棕治朗	寺井 正也	杉山 孝博	岐阜県	西岡 日出夫
福島県	本吉 正男	長吉 多佳子	鈴木 宏尚	高柳 淑子	奈良県
猪狩 則子	東京都	新津 ふみ子	玉置 英明	静岡県	稲田 禮子
茨城県	阿部 まさ子	松友 祐子	服部 恵津子	土屋 幸己	広島県
小松崎 和子	池口 武志	望月 明美	福田 昌子	愛知県	角川 克己
関 正夫	上田 恭子	森 妙子	安原 久咲子	井浪 典子	愛媛県
前畑 安宏	梅田 義夫	横田 洋子	吉田 久美子	河原 朗治	松原 一紘
栃木県	奥谷 信子	神奈川県	匿名希望	近藤 豊彦	福岡県
中村 久美子	勝 幸子	池田 高志	新潟県	深町 聖子	角 洋一郎
群馬県	金平 輝子	石井 義高	大澤 澄男	三重県	大分県
岡野 光利	五味 朗	岩田 恵美子	河田 珪子	大西 彰夫	畑 昭子
恩田 初男	頃安 健司	大石 恵子	須田 恒夫	京都府	鹿児島県
埼玉県	城野 東太	大久保 弥	山梨県	梶宏・寿美子	富永 泰子
			天谷 まり子	大阪府	
			近藤 睦子	大道 直行	

さわやかパートナー法人 (8件)

(50音順)

内村物産株式会社
社会福祉法人五泉市社会福祉協議会
NPO法人
さわやか福祉の会流山ユー・アイネット
医療法人社団潤康会芝パーククリニック
公益財団法人住友生命健康財団
ハート公所つきみ野
NPO法人福祉バンク大館
株式会社プロテリアル

一般ご寄付 (1件)

(特定事業へのご寄付を含む)

匿名希望 (2万円)

地域助け合い基金ご寄付 (1件)

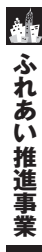
△石川県・能登半島地震支援△
大坪 直子 (1万円)

さわやか活動日記(抄)

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SCⅡ生活支援コーディネーター

各地・各事業の取り組みをご紹介します



ふれあい推進事業

第1層協議体開催

「目指す地域像」を共通目標として話し合い

■北名古屋市（愛知県）

【5月14日】昨年度末に立ち上がった北名古屋市第1層協議体の今年度初会合が行われた。当財団も依頼を受け、年3回の会議に参加することになった。

今回の目的は「目指す地域像を考える」。第1層としての共通の目標を話し合い、何から取り組むかにつ

なげることとした。第1層

SCから相談を受けプログラ

ムと一緒に考えた。「協

議会」にならず協議体

にしていくにはどうしたら

よいか」「協議体の役割に

ついての理解がメンバーに

よって違うがどうしたらよ

いか」などの悩みがある中、

Ⅱ第1層としての共通の目的をつくらうという企画になった。

前半は「北名古屋市の地

域課題について」。第2層

協議体4圏域で出されてい

る課題を共有した上で、さ

らに第1層協議体メンバ

ーに第2層SCからも加わり、

市全体の地域課題をグル

ープワークで話し合った。第

1層協議体に新自治会長と

して30代男性が初参加し、

世代が違う人との意見交換

はお互い刺激になった様子

だった。「若い世代の参加

」「顔が見える関係」「困り

事が言える地域」などの意見が出され、地域愛が広がり「もっと魅力ある地域にしたい」と、とても活発な議論になった。

後半は「目指す地域像について」。最初に財団から

「目指す地域像とは」「目

指す地域像を考えるポイン

ト」「目指す地域像の実現

に向けてのポイント」を説

明し、どんな地域にしたい

か、その実現のためには何

から取り組むかについて、

2つのグループに分かれて

話し合った。「魅力をどう

伝えるか」「町民運動会な



北名古屋市第1層協議体、今年度初会合の様子

ど地域の多世代でできるイベントをきっかけにする」「良い事例を伝える」「自治会ごとに話し合う」などさまざまな方法を発表で共

有した。

まとめで財団より「委員それぞれ立場は違うが、地域を良くしていきたいという地域愛が感じられた。5年後10年後の目指す地域像という共通の目標を共有し、実現するための方策を出し合ったが、その中の何から取り組むか具体的に話し合い、地域に働きかけていく動きにつなげてほしい」とコメントした。

次回9月開催の第1層協議体では「曼荼羅チャート」をつくる予定。真ん中に目指す地域像を入れ、その周りに実現に向けた方策を入

れていき、それを充実させながら具体的な取り組みに

つなげていくとのことだった。
(鶴山 芳子)

「生活支援コーディネーター情報交換会 in 北河内」開催 実践や悩みから学び合い、つながりをつくる ■ 大阪府

〔5月29日〕大阪府北河内地域のSCを中心とした実行委員会の企画・運営によ

供、まとめのコメントで協力した。

り、「生活支援コーディネーター情報交換会 in 北河内」が開催された。この情報交換会は、同府「本音で語ろう!!情報交換会」の北河内版として、地域や所属を

当日は、北河内7市(交野市・門真市・四條畷市・大東市・寝屋川市・枚方市・守口市)のSCや行政担当者など28名が集まり、各市の取り組み紹介やグループでの意見交換を行った。

事業に携わる仲間同士が、日頃の実践や悩み、工夫を本音で語り合える場として企画された。当財団は同事業についての講義と情報提

前半は各市からの実践報告。第2層協議体の交流会、生活サポーター養成講座、スマートフォン講座、シルバー人材センターとの連携、移動支援の取り組みなど、



「生活支援コーディネーター情報交換会 in 北河内」参加者の皆さん

それぞれの地域での活動が紹介された。地域によって進め方は違っても、「住民の力を生かしたい」「地域の支え合いを育てたい」という思いは共通しており、参加者同士熱心に耳を傾け、メモを取りながら聞く姿が見られた。

後半の意見交換が始まる前に、財団の助け合い推進パートナー永濱旭氏によるプチ体操を全体で行いリフレッシュした。

意見交換では、「こんなやつてる」「こんなやりたい」をテーマにグループワークを行った。この情報交換会の魅力は、成功事例だけでなく、悩んでいることやうまくいかないことも率直に話せること。

「否定しない」「話しすぎない」「好意的に聴く」というルールの下、参加者一人ひとりが安心して発言し、「うちも同じです」「そんな方法があったんですね」といった声が自然に飛び交っていた。休憩時間にも名刺交換や情報交換が活発に行われ、市町村を越えるつながりが広がった。

この事業は地域ごとに状況や課題が異なるからこそ、こうした横のつながりが大きな力になる。1人で抱え込むのではなく、互いの実践か

役員就退任のお知らせ（敬称略）

【理事 就任】（6月22日付）

高橋 陽子

公益社団法人

日本フイランソロビー協会理事長

【評議員 就任】（6月22日付）

本多 則恵

一般社団法人成年後見普及協会理事

【評議員 退任】（6月22日付）

田中 克人

公益財団法人伊藤謝恩育英財団理事

【評議員 退任（6月6日逝去）】

尾崎 雄

NPO法人コミュニティケアリンク

東京副理事長

尾崎様には、当財団の創立時から多大なるご支援を賜りました。本誌でもまさにジャーナリストとして、介護保険制度の特集や、看取り・終末期を考える連載エッセイなど、鋭くもあたたかな提言を発信してくださいました。心からのご冥福をお祈りいたします。

事務所 だより

●本誌が皆様のお手元に届く頃、ちょうど今年度の全国交流フォーラムの日を迎える。当日は、お越しいただく皆様に財団の取り組みをあらためてご報告し、交流していただけるよう職員一同、心を込めて準備し皆様をお迎えいたします。

(目崎 智恵子、島村 彰)

ら学び合い、支え合いながら進めていくことが大切。今回の情報交換会も、実行委員の熱意と工夫によって、とてもあたたかく実りある場となった。この場で生まれた学びや出会いが、それぞれの地域での新たな実践につながり、北河内地域の支え合いの輪がさらに広がっていくことを期待したい。

情報紙

助け合いの仕組みづくりをさらに進めよう

『さあ、やろう』vol.31 近日発行！

生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを考える情報紙『さあ、やろう』。

地域支援事業に携わり、地域における助け合いの仕組みづくりを進めている方々の参考となる記事を掲載し、全国の関係者の皆さんに頒布しています。また、財団ホームページからダウンロードもできます。

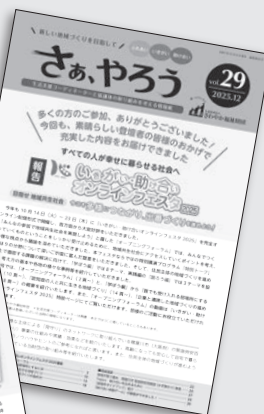
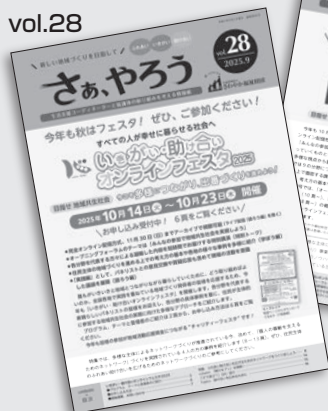
【vol.31 主な内容】

- ◆「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2026」プログラム等の紹介
- ◆特集・「いきがい・助け合いフェスタin長崎」からその方法と成果、その後の展開を考える
- ◆「SC情報交換会のススメ」(静岡県ブロック、京都府ブロック)
- ◆Topics 助け合いを広めるために ほか

財団HPトップページ→「ライブラリー」→「さあ、言おう・さあ、やろう」にお進みください

vol.29

vol.28



vol.30



【お問合せ】メール post@sawayakazaidan.or.jp

電話 (03) 5470-7751

6月12日、認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸にて視察研修を受け入れていただいた。研修では、同法人が運営する「あすパーク」と「生きがい活動ステーション」の取り組みを中心に、地域拠点の運営や市民主体の活動創出の仕組みについて学んだ。特に印象的だったのは、活動の立ち上げを「きっかけづくり」から「組織化」「コミュニティビジネス化」へと段階的に支援する体系である。少額助成を起点に伴走支援を行い、継続的な地域活動へと発展させていく手法は、実効性の高いモデルだと感じた。

あすパークでは、公園内の拠点を基盤に、障がいのある方や地域住民が緩やかにつながる居場所づくりが進められていた。生きがい活動ステーションでも、多様な人々が役割を持ちながら関わることで、社会参加や生きがいが創出されており、日常的な関係性の中で共生が実現していた。

さらに本研修では、私自身の経験を踏まえ、「障がいのある方々との関わり」と「児童養護施設」をテーマに発表する機会を得た。参加者との間で多様な意見が交わされ、対話を通して相互理解を深める有意義な時間となった。

本研修を通して、地域共生社会の実現には、単に場を設けるだけでなく、多様な主体が関係性を築きながら継続的に関わり続ける仕組みづくりが重要であることを再認識した。また、その基



島村による発表の様子

盤として、人と人をつなぐコーディネート機能や、活動を支える中間支援の役割が不可欠であると感じた。

今後は、本研修で得た知見を普及啓発や人材育成に生かすとともに、学校と地域をつなぐ具体的な取り組みへと発展させ、共生社会の担い手育成に一層寄与していきたい。

(東京都教育委員会研修生・島村 彰)

* * *

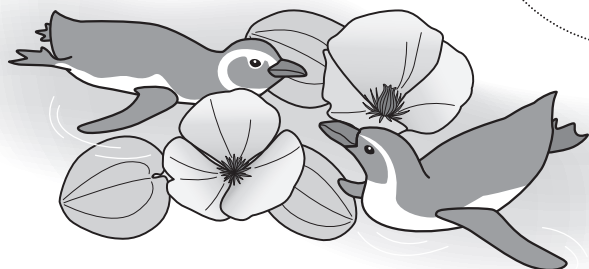
コミュニティ・サポートセンター神戸様からのメッセージ

■ デジタル化の著しい世の中にあっても、ダイレクトな対話ほど響くものはありません。これからもコミュニティにますます磨きをかけて、周囲に数多の架け橋をかけ続けてくださることを願っています。

(ファウンダー・中村順子さん)

■ 島村さんの、うなずきながら熱心にお話を聞かれる姿勢を拝見し、初心に帰って頑張ろうと思った次第です。CS神戸の一員のように熱く語っていただけたことが何より有難かったです! (事務局長・山村弘美さん)

みんなの広場



素晴らしい取り組み 「赤ちゃん職員」

こもさん

東京都

5月号「赤ちゃん職員」、なんて
素敵な取り組み!! 記事を読んだ瞬
間からとても明るい気持ちになりま
した。

そこに集まるすべての人々の笑顔
が目に見えます。ミッションのお
散歩、給与のオムツ、早期退職とは
なんとすごい発想でしょう。

昔、新しい土地での淋しかったワ
ンオペ子育て時代がありました。ま
た昨今、街中では小さい子どもとふ
れあう機会が減ってきています。

子どもの笑顔、たたずまいは生き
る活力になると思います。それを自
然に促し、なおかつ笑顔で人と人
とつながり交流していけるなんて、

素晴らしいと思いました。

誰にでもできる役割がある—まさ
にそれを体現してくれているステキ
な取り組みですね。

子育ての大変さに ビックリ、たまげた

北原 豊一さん 90歳

鹿児島県

5月号「新・ひとりごと」を読ん
だ。子育てというものがそんなに大
変なものだとは知らなかった。楽し
いものうれしいものとはばかり思っ
ていたのだ。大変だと口先では言っ
ているが、内心はうれしいのだろう、
喜んでいるものとはかり思っていた
だが違っているのに私は驚きビク
リ、たまげてしまった。

人間、経験してみないと分かるも

のではないのだね。経験しても逆の捉え方をしてしまうこともある。先の大戦がそう、いい例でもある。今度やったら勝つという人もいるのだ。必ずしも経験がベターではないのだね。

一人ひとりの多様な考え方が尊重される社会を目指したいです。だからこそ、その大前提としてお互いを思いやるふれあい・助け合いが不可欠ですね。

もっと本気で 住民と向き合おう

塚原 健司さん 40歳

福島県

町役場の福祉部局で勤務しています。5月号の巻頭言「改めて行政の本気度が問われる 助け合いの地域

づくり」、このタイトルにまずはドキッとした。住民に分かってもらうのは大変だとは言うものの、自分がこれまでどれだけ本気で地域での支え合いの必要性を訴えてきたのか、全然足りてないじゃないかと思いました。

この1年、もっと住民さんと向き合いがなばってみようと考えながら読ませていただきました。

ありがとうございます。ご苦労も多いと思いますが、一緒にみんなを取り組んでいきましょう！

投稿募集

ぜひ皆様のお寄せください

『さあ、言おう』では、取り上げたテーマに対する読者の皆様からのご意見・ご感想、あるいは普段気になっているテーマに基づいた体験談や提言などを随時募集しています。

本誌添付のはがきなどをご利用ください。

常設テーマ

- 本誌記事のご感想
- 地域の助け合い活動について
- 助け合いの地域づくりについて
- いきがい、社会参加について
- 居場所や地縁組織、NPOの活動について
- 新地域支援事業について
- 生き方について など

送付先

〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館 7 階
公益財団法人さわか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX (03) 5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp



『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます（さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です）。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金（硬貨）でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵に はり絵・池田げんえい



「北山杉」

編集後記 ●好評の「生き方・自分流」、今月号は「趣味は社会貢献」という伊豆の国市の建設会社会長、土屋龍太郎さんに登場していただきました（P4～）。●「活動の現場から」は、神戸の労働者協同組合がつくる地域のプラットフォームの事例です（P10～）。●「シリーズ定年、その先へ」、活動の広がり注目です（P22～）。●3月号掲載のNPO法人泉の会さんをめぐるあたたかいご縁、当財団も感謝です（P24コラム）。●「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2026」にぜひご参加ください！（表紙裏、P16～）。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

野村 浩子

宮崎県えびの市に本社をおく、
電子部品や自動車部品などの
品質検査を手掛ける、

えびの電子工業には、少し変わった

「仕事と生活の両立応援宣言書」がある。

「働きながら、趣味・学業・不妊治療・子育て・

介護・闘病を頑張る仲間を応援します」

子育てや介護との両立だけではなく、

趣味や学業など事由を問わず、

その人にとって大事な私生活と仕事との両立を応援しよう、

もちろん性別は問わない、正規・非正規の立場も問わないというものだ。

こんな職場なら、安心して長く働ける、

もっと職場に貢献したいと思えるのではないか。



●公益財団法人

日本女性学習財団理事長

財団では「職場のジェンダーギャップ・チェックリスト」を開発し、
HP (<http://www.jawe2011.jp>) で公開しています。どなたでも無料で
30問の設問でギャップを確認できます。課題の可視化に、ぜひご活用ください。

さあ、7月号

通巻395号 2026年7月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい

編集担当 塩瀬潔泉

取材協力 七七舎

イラスト 福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子

発行元 公益財団法人さわか福祉財団

〒105-0011

東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階

Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755

E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp

<https://www.sawayakazaidan.or.jp>

Printed in Japan

助け合いの動画「心つながる」 ぜひご覧ください

全国各地の住民が主体的に取り組んでいる助け合い活動を動画でお伝えする「心つながる」シリーズ。第1弾「NPO法人ふれあい天童」（山形県天童市）を財団ホームページでリリースいたしました。

住民のニーズに応じて、移動・生活支援の有償ボランティア活動、認知症の人も役割を持って一緒に過ごす居場所の様子をご覧ください。

生活支援コーディネーターや協議体、自治体職員など仕掛ける側の皆様は、フォーラムや勉強会などでご活用ください。また、「助け合い活動を始めてみたい」「他の活動からヒントを得たい」という方々もぜひご覧ください！

【動画視聴URL】

https://www.sawayakazaidan.or.jp/information/news/series_kokorotsunagaru_vol01/



動画はコチラ
からもご覧
いただけます



～動画「心つながる」より～

居場所ではみんなが
役割を持って参加



「いただきます」と
声をかけ合ってランチタイム